

初期浮世草子の研究
概要書

中嶋隆



No. 2

No. 1

「初期浮世草子の研究」概要書

本論文の構成とテーマ

本論考で考察の対象としたのは、主に十七世紀に創作された諸作品中、西鶴作品を中心とし、仮名草子から元禄末期のハ文字屋本登場までの小説類である。従来、この期の浮世草子研究は、西鶴のみが突出した感があり、その創作意識・文芸性・作品の成立時期・典拠

早稲田大学論文用紙

等の諸問題について、多く論じられてきた。本論考の意図は、通時的に西鶴を相対化する。こと、すなわち現実再現を核とする近世前期小説史の展開のなかで、西鶴を論ずることにある。具体的には、仮名草子から西鶴への展開、西鶴作品の同時代小説への影響、西鶴没後の浮世草子の傾向等についての考察がその内容である。ただし、西鶴以外の浮世草子研究は、伝記、書誌等の調査から始めなければならぬ側面がある中で、本論考でも、新賢



No. 4

No. 3

早稲田大学論文用紙

料の紹介を含めた基礎研究の充實をはかった。

序章では、仮名草子から浮世草子へのネカ

タイプな継承について、ジャンルの定義や研

究方法論に言及しつつ、通時的視点を明確化

した。

第一章は、仮名草子の代表的作品『因果物語

語』、『浮世物語』を例にとり、前者は仏教説話

の終焉、後者は主人公の変質という視点から、

西鶴作品への展開を考察した。また西鶴作品

については、『好色一代男』、『好色一代女』、『武道

伝来記』、『武家義理物語』、『世間胸算用』の作品

構造を論じた。これらの論考では、作品テ

マの推移を西鶴の創作意識の展開として整序

した。従来の研究方法や、あるいは現存版本

の版面の不整合から、草稿の成立時期等を推

定するような方法をとり、作品構造そのもの

を機能的に分析した。

第二章では、西鶴作品の影響が初めてあら

われる『西村本』の書誌的問題と西鶴模倣の

具体的様相について考証した。また西村市郎



No. 6

No. 5

右衛門は書肆でもあるので、当時の大坂・京都間の出版事情の相違等を視野に入れつつ、その出版者のリストアップを試み、彼の没年を確定した。	第三章は、西鶴没後の浮世草子と作者に関する論考である。西村市郎右衛門と同じ書肆作家である林文会堂義端の出版活動を調査し、年譜を作成した。また都の錦については、その家系に関する新資料と新出浮世草子に考察を加えた。	西鶴の文体・趣向を模倣すると同時に演劇的傾向を強める元禄末期の浮世草子は、けいせい請状の演劇的要素を具体的に考察した。またこの期の浮世草子と役者評判記が相互媒介的に展開することについて論及した。	各章各節の概要	序章 仮名草子・浮世草子における人小説とは何か	本章の冒頭では、昭和三十年前後の、仮名
--	---	---	---------	-------------------------	---------------------



No. 8

No. 7

早稲田大学論文用紙

草子の定義をめぐる中村幸彦・暉峻康隆・野田寿雄諸氏の論争をとりあげ、ジャンルとしての実体のない仮名草子の文学史的把握は、史的陳述を可能にするような、享受者側の小説性に関する価値判断にかかっている。述べた。その上で、現実再現の小説様式の始源を『好色一代男』にみるべきであるが、現実再現を作者の認識の問題と考えるべきではなく、そのテキスト構造を分析すべきである。と主張した。

『好色一代男』は、以下のような作品構造をもつ。

(1) 『好色一代男』という書名には、『源氏物語』伊勢物語の『色好み』を俳諧化するといふ作者の意図がコード化されている。

(2) 始章・終章は、御伽草子の枠組をもつ。

(3) 遊里／浮世 堂上／地下の対立的構造を取り合わせることが、作品構造の基調をなし、ている。

(4) はなし手・聞き手の構成する『はなし』の



No. 10

No. 9

早稲田大学論文用紙

場が叙述に内在する。

(5) 教訓性の欠如してゐる点で「仮名草子」と

は言えないこの作品の様式にかかわる論者

の混乱を修正してゐるのは「軽口咄」であ

る。

西鶴好色物の文体は、西村本「好色三代男」

の模倣を経て、元禄十年頃までに大量に出版

された好色本の叙述に踏襲されるが、元禄

末期には、西沢一風・江島其磧等によつて、

好色本に定着した文体の描出力の貧弱さが自

覚されはじめ、西鶴の文章を剽窃することと

現実性が確保される。

一方では、山嵐三右衛門・坂田藤十郎・市川

団十郎・芳沢あやめ等名優の活躍する元禄歌

舞伎の長台詞や口上、あるいはその舞台姿を

写す役者評判記的文体が顕著になる。この二

要素、すなわち西鶴の模倣と演劇を媒介とし

た写実性により、以降の浮世草子の「現実再

現」が展開した。



No. 12

No. 11

早稲田大学論文用紙

一章 仮名草子から西鶴へ
一 因果物語の展開
口承・書承によって説話が伝播した中世と
異なり、整版印刷による大量出版の行われた
近世は、通俗仏書や仮名草子によって、仏教
説話が流布した。伝承手段の相違は、説話の
変貌をまねく。例えば、立山曼荼羅等にみ
られる片袖説話は、説教の種本的性格をもつ
片仮名本因果物語では、靈驗譚の枠組が
明確だが、新御伽婢子諸国心中女では恋
物語、好色三代男では笑話に変質する。
本節で列举した証例は省略するけれども、
鈴木正三の法談を採録した因果物語の譬
喩因縁譚は、怪異小説や笑話として、趣向化
文芸化の度合を深めていく。
元禄末・宝永期になると、諸国因果物語
新玉櫛笥のように、法談の話柄を儒教の
天道思想で処理する例もみられるようになる。
また、この時期の通俗仏書善悪因果集で
は、浮世草子の影響を受け、視覚的描写や時



No. 14

No. 13

B 卷一の十と卷三の一		浮世房の諸国遍歴	
出家まで（現実社会からの脱落）		A 卷一の二と卷一の九	
瓢太郎の誕生から		二分して理解されているが、本節では、次の	
ように三分する立場をとる		画化される前半と教訓者に変質する後半とに	
一般に「浮世物語」の構成は、		浮世房が戯	
好色一代男の主人公が、		作品構造上、どの	
ような機能をもつか、		考察した。	
構成の類似の指摘される		「浮世物語」と	
ニ「浮世房」から「世之介」へ		早稲田大学論文用紙	
文芸に顕現するのは西鶴の作品であつた。		れないうものになつており、その矛盾が最初に	
社会の多様性は、因果応報の理法では律しき		利益を追求する民衆の意識に迎合する。近世	
一方では読物として娯楽化し、他方では現世		このように、衆生済度の本来の目的を離れ、	
出版文化のもとで展開してきた仏教説話は、		事的話柄を文脈に取り込む例がみられる。	



No. 16

No. 15

早稲田大学論文用紙

(「鴉の戒」の放浪)

C 卷三の二の終章 浮世房が「御咄の衆」

になり「蛻仙」するまで「御咄の衆」

としての偽装定着)

A から B、B から C へ移行するための過渡

的七章(卷一の十の三、卷二の十一の

卷三の二)には、外見上の主人公の変化が実

は偽装であるとする作者の意図が集中的にあ

らわれてゐる。すなわち、主人公の行動にお

いて長編性を分析する観点に立てば、卷三の

二以降の浮世房は、構成の破綻を示すものに

なるが、主人公が脱著・放浪・偽装定着する

という作品構成は、語り手として浮世房を設

定するためには必然性をもつ。啓蒙的作者と

読者との間の縦軸のあらゆる位置に、擬似的

に変化する浮世房は、多様な教訓を読者に示

す点では効果的主人公だった。

教訓性を排除した「好色一代男」の世之介

は、教訓の語り手である「浮世房」とは異な

る機能をもつ。書石が暗示するように、世之



No. 18

No. 19

早稲田大学論文用紙

介は、物語的主人公を俳諧化した存在である。このような主人公が、「御伽草子」的構成のなかで、近宝・天和期の現実社会を背景に行動するという構図は、雅を俗に転化している点で、きわめて俳諧的である。浮世物語のよくな卑俗な主人公に対する嘲笑とは異質な笑いを、世之介は読者に提供した。

三 好色一代男 終章の「俳諧」

好色一代男 終章の解釈についての野間光辰・暉峻康隆両氏の極端な対立は、この章の前半と後半との間の、叙述トーンの相違に起因する。前半の老衰した世之介の述懐と、後半の好色丸の積荷にうかかれる楽天性との矛盾をどう解釈するか、読解の鍵となる。世之介の女護の島渡りは、補陀落渡海のパロディであるとする松田修氏説に賛成する。ただし、本章に死のイメージが揺曳しているわけびはない。西鶴は、後半で、補陀落船を好色丸に、めざすべき観音浄土を、男の極楽浄



No. 20

No. 19

早稲田大学論文用紙

上である女護の島に変えてしまった。いやは
「見立て」による転じを行なったところ、
本章の俳諧的笑いが生じた。読者の「大笑い」
のさなか、世之介は物語の境界を越えたので
ある。
四「好色一代女」の叙述の構造
この作品は、女の一生を插いたのか、好色
風俗を紹介したもののなにかという両説の対立
は、両要素を「世界」と「趣向」の関係とし
て把握することにより解消される。「好色一代
女」の作品構造の特徴は、語り手の尾に「遊
仙窟」の十娘・五嫂の俳を付し、仏教色を払
拭したことにある。この趣向が、「性」の視点
から再構成された時空で、「一代女」が懺悔と
は無縁な変身を繰り返す事を可能にした。
始巻とは異なり、終巻で顕著なのは、落魄
した小町の俳である。すなわち、終巻は小町
伝説に寄り掛りながら、当世好色女の変身と
して展開してきたこの作品の内容に、懺悔物の



No. 22

No. 21

早稲田大学論文用紙

杵組をほめ、既成様式を読者に再認識させる機能をもつ。終章の懺悔を準備し、仙境の語り手から発心する老女への「一代女」の変質をスミーズに行なわせる要因となつたのは、仏教色こそ薄いものの、作品中にはさみ込まれる一人称で過去を回想する叙述であらう。始章が欠ければ斬新さを喪失し、終章が欠ければ「趣向倒れ」に終わる。一見矛盾する両章は、このように持ちつ持たれつの関係にある。

五 衆道と主君殺し

本節では、前田金五郎氏が「武家義理物語」巻五の四の原拠とする、明暦二年七月の稲葉伊勢守殺害事件についての新資料を紹介した。すなわち、小田原藩時代の稲葉家江戸藩邸日録、永代日記の記録である。この記事は、事件と小田原藩主稲葉正則の事件処理、幕閣への対応、犯人糾明の過程などについて、詳細な記録であり、現存資料のなかでは、当事



No. 24

No. 23

早稲田大学論文用紙

者の記録という点で、最も事実に近い。
さらに、この『永代日記』と、『厳有院殿御
実紀』^四『玉滴隠見』^四に記される巻説とを比較し
て、巻説が、犯人糾察の謎解きと処刑の残虐
さという二要素を肥大する傾向にある事を指摘し
た。『武家義理物語』^四巻五の四は、この二要素
を欠くので、西鶴が直接この事件の巻説に取
材したとは言えない。
が、『男色大鑑』^四巻二の二、『武道伝来記』^四巻
五の二のように、主君・寵童・念者の三角関
係を描く章がある。これらの短編では、主君
が敵討ちの対象とされることはないが、真の
敵は主君であることが、西鶴と読者との間に
一種の默契をなしていた。稲葉伊勢守殺害事
件のように、衆道の意地と君臣の倫理とが衝
突する事態が現実には起こり、西鶴は、この
ような状況を、主君殺しを暗示しながら作品
化したのである。

六『世間胸算用』^四の作品構造



No. 26

No. 25

早稲田大学論文用紙

世間胸算用^レは、西鶴が自らを傍観者の位置に置き、下層町人の生活を諦感をもつて描いたと考えるのが通説である。この通説は、作品構造の問題を、西鶴の認識や作家精神に横すべりさせたにすぎない。

この作品の特徴は、大晦日の「人間」が、大晦日にかかわる「物」の「情報」と等しいレベルで作品世界を構成している点にある。すなわち、作品をささえるのは、人間・物・情報「が等価に構成する」状況である。そのものが持つ「アリテイ」である。

また、しばしば繰り返される同内容の教訓は、教訓内容に斬新な面白さのあった「日本永代蔵」と異なり、大晦日を虚構化した「一つ展開する小説の時空に致富譚の枠をはめ、描写の視点を固定し、一方では、現実的観点から作品を読む」とする読者に臨場感を与える装置でもある。登場人物が「状況」を構成するのびはなく、繰り返される教訓が、人物・情報からなる「状況」を設定するという作品



No. 28

No. 27

早稲田大学論文用紙

江戸西村半矢衛の刊行書を含めると、俳書	た西村の出版した俳書・実用書を総覧した。	では、小説類のほか、ほとんど未調査であ	書肆でもある西村市郎右衛門について、本節	と称される浮世草子を執筆、フロモートした	元禄初期俳諧の俳諧師でもあり、「西村本」	の推定	一 西村市郎右衛門未達の出版活動と没年	二章 西鶴と「西村本」	算用 四の独創性がある。	階層を超えた笑いを創造したことに、世間胸	人の視点から、下層町人の生活を虚構化し、	自分達に向けられた笑いでもあった。中層町	通する「状況」として描かれていたために、	する。が、その微笑は、大晦日か町人に共	るように、下層町人の生活を笑いながら傍観	はなし手と読者は、あたかも共犯関係にあ	い独自の作品世界の根拠となっていた。	構造が、この作品の随想とも小説ともつか
---------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----	---------------------	-------------	--------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	---------------------	--------------------	---------------------



No. 30

No. 29

早稲田大学論文用紙

に反映した。

なお、出版書の調査から、初代西村市郎右

衛門の没年を、元禄九年三月から十二月の間

と推定したか、野間光辰氏の教示により、京

都大雲院の過去帳を調査した結果、推定どお

り、元禄九年九月三日に市郎右衛門が他界し

ていることが判明した。

二、浅草拾遺物語^四について本節では、東北大学野間文庫蔵^五浅草拾遺



No. 32

No. 31

早稲田大学論文用紙

物語^四について、作者洛下旅館の前作^四宗祇
諸国物語^四と比較しながら、文体面での西鶴
の模倣をまず指摘した。次いで、巻四「狂気
出し伊勢の神風」を例にとり、西鶴文体の模
倣が、一見新しい説話であるかのような印象
を与えるが、その内容は、西鶴の影響のな
い前作^四宗祇諸国物語^四と同じであることにつ
いて論じた。^二
さらに^四元亨釈書^四第九「釈道公」の故事
を典拠とする巻二「瀬田の社の永き夜の夢」
と、同じ故事を典拠とする^四本朝諸社一覽^四
玉櫛寄^四とを比較しながら、素材処理の特
徴を明らかにした。以上で考察した西鶴の影
響と限界は、版元西村市郎右衛門が、洛下旅
館に西鶴の模倣を強制したことによってまた
らされた。^二
三「西村本」の西鶴模倣
西鶴の影響の顕著な貞享三年刊行の四部の
「西村本」のうち、最も意識的に西鶴を模倣



No. 34

No. 33

早稲田大学論文用紙

し、他の作品への影響力も強い。『好色三代男』にみられる西鶴の影響について考察した。

まず、素材・趣向面での模倣を十八箇所列挙した上、当時の風俗を即事的に描写した西鶴と同様な執筆姿勢を『好色三代男』の作者がもっていることを指摘する。茶屋女・歌比丘尼・小間物売などの好色風俗を描き込んだり、当時流行の歌祭文を描写にもりこんでいるが、これは、西鶴の『好色一代女』『好色五人女』に先行する試みであった。

文体面では、『好色三代男』の作者は、『おかしな大笑』『是を思へば』等の西鶴の慣用語を取り入れ、特に体言止めを多用してその模倣を試みたが、文末の情意的形容詞の少ない点にみられるように、西鶴のような躍動感の乏しい文体となつた。また修辭等に口語的要素が見られるけれども、和歌文脈が基調をなし、西鶴の試みたような文体操作、たとえば俗事を雅文体で描いて笑いをさそうような例は認められない。



No. 36

No. 35

好色三代男^ロの西鶴模倣は、他の「西村
本^レ」(「浅草拾遺物語」^ロ諸国心中女^ロ、好色伊
勢物語^ロ)に影響を与えた。

四「諸国心中女^ロ」の西鶴模倣

「諸国心中女^ロ」の西鶴模倣を考察しつつ、

「好色三代男^ロ」の草稿から「諸国心中女^ロ」に、

相当数の女性にかかわる話が流用されたとい

う。太刀川清氏説に反論した。太刀川氏の立論

の根拠は、両書に類似した話が存在するとい

早稲田大学論文用紙

う点にあるが、本節では具体的証例(省略)

をあげ、「好色三代男^ロ」では、読者を哄笑させよ

うという視点から、「諸国心中女^ロ」と同一の趣

向がとらえ返されていることを指摘した。文

体も、両書は大きく異なっている。

版元西村市郎右衛門が、作者の創作活動に

強く介在していたと推定される。「西村本^レ」に

おいては、類似したテーマや趣向をもつ作品

が多くなるのはやむをえないことであつた。



No. 38

No. 37

五・六・七「西村本の書誌と解題（一）」

(二)(三)

江本裕氏・湯沢賢之助氏の調査の備わる

宗祇諸国物語山新御伽婢子山を除く「西村本

の書誌調査を報告したのが五節・六節・七節

である。調査の対象とした作品は、天和三年

刊「小夜衣山、天和四年刊「花の如残山、貞享三年刊「諸国心中女山、好色三代男山、好色伊勢物語山浅草拾遺物語山、貞享四年刊「御伽比丘尼新山竹斎山山路の露山、元禄五年刊「諸国新百

早稲田大学論文用紙

物かたり山である。

五節では、現存する八本の「好色伊勢物語

のうち、阪本竜門文庫が初版本である事、頭

書型式は、当時流布していた坂内直頼著「頭

書伊勢物語抄山を模倣するが、作者が直接参

考にしている注釈書は、延宝八年刊「伊勢物

語愚見抄山であることなどを述べた。六節では、披見した「好色三代男山五本が、

全て雷文地巻竜紋の行成表紙をもち、天理図

書館本が比較的善本であること、「諸国心中女



No. 40

No. 39

早稲田大学論文用紙

東北大学狩野文庫本にも、^四好色三代男^四と同様の行成表紙が使われており、^三恐らく西書とも初版時の原装とみられること、^二孤本である^一御伽比丘尼^四の改題本^三諸国新百物語^四大東急記念文庫本は、^二従来未紹介の市郎右衛門と半矢衛の連名版であること、^一山路の露^四の最善本は早稲田大学本、^二新竹斎^四の最善本は阪本竜門文庫本であること等の新見を示した。七節では、^四小夜衣^四が仮名草子^四錦木^四を剽窃していること、^三花の名残^四は岩瀬文庫本が最善本であり、^二作者を西村市郎右衛門とする水谷不倒氏説には疑問があることなを指摘した。

ハ、^二西村本^一の書誌的形態

貞享二、四年刊行^一西村本^二の書誌的形態の特徴について、^三披閲した伝本から初版本を選択し、^四考察を加えた^一西村本^二は、^三書肆市郎右衛門の作者に対する絶対的優位の関係のもので出版されたので、^四以下のような特徴的



No. 42

No. 41

形態をもった。

(1) 本文は十一行である。(2) 序題・目録題・

内題・尾題を記すのを原則とする。(3) 各巻の

目録を巻頭に集める惣目録の形式をとる。(4)

題簽は各冊の中央に貼られる。(5) 原則として

大本五巻五冊で出版されるが、書型は、天地

に長い唐本様の外形をもつ。

特に(5)の特徴は、和刻本漢籍や仮名草子に

も見られるが、二条派口伝の様式によると思

われる題簽の貼り様とあわせて、伝統文化に

早稲田大学論文用紙

立脚しようとする市郎右衛門の意識の一端が

うかがわれる。

また、貞享二年正月刊『西鶴諸国』はなし

は、同時に刊行された『宗祇諸国物語』と酷

似した唐本様の外形と表紙(雲形地巻竜紋)

をもつ。『西鶴諸国』はなしの成立には、書肆

西村との間のなんらかの特殊な事情が存在し

ていると考えらるべきである。



No. 84

No. 43

早稲田大学論文用紙

三章 西鶴没後の作者と浮世草子

一 林文会堂義端に関する新資料

本節では、滋賀県野洲町木村盛美氏蔵の貼

交帳のなかから、林文会堂の伝記を補う資料

となる一枚を紹介した。この資料は、古義堂

門人で、北村孝吟と親交の厚かった北村宗雪

関係の貼交の一枚で、宗雪の孫の鳳梧の手に

なると思われる。林文会堂は、父子ともに古

義堂に學んでいゝので、資料の信頼性は極め

て高い。

本資料によつて、以下の三点が明らかとな

った。(1)享年が四十九歳であること。(2)古義

堂のみならず、伊藤因菴に師事していること。

(3)祖先が近江国宇賀野村出身であり、祖母が

山崎氏であること。

二 林文会堂義端年譜稿

玉柳哥^四玉簾子^四の作者で、伊藤仁斎門

下の書肆でもあった林義端の年譜である。義

端は、自ら述べるごとく、書癖が高じて、西



No. 46

No. 45

以上、調査によつて、義端が「歳旦詩集」		を毎春刊行してゐたことや、毛利元次の命を		うけて「徳山石勝」等を出版し、東涯・梅宇		と同行して元次と謁見してゐることなどが明		らかになつた。		三 林九兵衛義端の出版活動		本節は、林義端の三十五部に及ぶ刊行書を		列挙し、関係した人物を整理したものである。		和刻本漢籍は、 ^口 物類相感志 ^四 以下九部が出版		される。仁斎・東涯をはじめ、一色時棟・北	
類、宮内庁書陵部蔵の毛利元次旧蔵書類であ		る。		義堂文庫に蔵される、仁斎の長子東涯の日記		作成した。主に調査した資料は天理図書館古		(3) 出版書の傾向、の三点から調査し、年譜を		義堂との関係、(2) 徳山藩主毛利元次との交流、		閑視されてきた林義端の活動について、(1) 古		中心に多くの書物を刊行した。本節では、等		替屋から書肆に転業したようだが、漢籍類を			

早稲田大学論文用紙



No. 48

No. 47

村可昌といつた古義堂ゆかりの漢学者が、一	種	の	ブ	レ	ー	ン	と	な	っ	て	二	ん	う	知	刻	本	の	出	版	に
か	か	わ	っ	て	い	る	、	詩	文	集	の	刊	行	は	、	確	認	さ	れ	
る	も	の	で	九	部	あ	る	、	な	か	で	も	、	歳	旦	詩	集	三		
元	彩	毫	山	の	出	版	と	、	同	時	代	の	漢	学	者	の	詩	文	を	
広	範	に	集	め	た	、	扶	桑	名	賢	文	集	、	扶	桑	名	賢	詩	集	
の	出	版	と	が	注	目	さ	れ	る	、	そ	の	他	の	刊	行	書	で	は	
医	書	・	漢	詩	文	入	門	書	・	怪	異	山	説	集	な	ど	が	目	立	
ち	、	十	七	部	に	反	ん	で	い	る	、									
義	端	の	出	版	書	の	多	く	は	、	古	義	堂	の	漢	学	者	達		
早稲田大学論文用紙																				
の	助	言	に	よ	り	企	画	さ	れ	た	も	の	で	あ	り	、	二	の	点	
が	彼	の	出	版	を	特	徴	づ	け	て	い	る	、							
四	、	都	の	錦	レ	の	新	出	浮	世	草	子								
本	節	で	は	、	ケ	ン	ブ	リ	ッ	ジ	大	学	に	蔵	さ	れ	る	E		
・	A	・	ワ	ト	ー	旧	蔵	、	喜	席	軒	自	省	著	述	本	と	仮		
題	さ	れ	た	浮	世	草	子	の	書	名	、	お	よ	び	刊	行	年	に	つ	
い	て	考	察	を	試	み	た	、												
考	証	の	過	程	は	省	略	し	、	結	論	の	み	述	べ	る	、	本		
書	の	作	者	は	、	都	の	錦	レ	に	相	違	な	く	、	ま	た	本	書	



No. 50

No. 49

早稲田大学論文用紙

五 都の錦の家系

は、好色堪忍ぶくろの改題本である。したがって、從來作者未詳とされてきた「好色堪忍ぶくろ」は、都の錦の著作ということになる。好色堪忍ぶくろは、都の錦の上方復帰後の宝永七・八年頃の刊行と推定できる。また、「喜席軒自省」の序文の付された時期、すなわち本書の改題時期は、正徳三年冬以降のことであろう。

不明な点の多い「都の錦」の伝記について、その家系を報告した。系図纂要の記す「都の錦」本名、実戸与一光風の眷族から、小田原藩 永代日記に載る記事を参照しつつ、調査可能な人物を摘記した。結論は以下のとおりである。

「都の錦」の祖父、実戸五郎大夫、後に庄右衛門と称した義政は、稲葉正則の小田原入部後、禄高百五十石で召し抱えられた。由比正雪の乱の起こった慶安四年に、根府川関警



No. 52

No. 51

早稲田大学論文用紙

固の任についであり、寛文二年には、四年間
一日の休みもなく小田原城勤番に励んだため、
褒賞を受ける。その嫡男直政、すなわち「都
の錦」の伯父は、弥五兵衛後に又左衛門と称
し、承応二年に大小姓に任ぜられて稲葉正則
に近侍した。さらに、藩政窮乏の折、寛文十
二・三年には「相模国西郡東筋」の代官を勤
めた。天和元年、稲葉正往（正通）が京都所
司代に補せられると、「摂州代官」として上方
に随伴する。

小田原藩関係の資料には、「都の錦」に直接
かかわる記録を見出すことが出来なかったが、
少なくとも、その家柄が稲葉家の百五十石取
り程度の侍だったことが確認できた。

六「けいせい請状」の方法

「けいせい請状」は、元禄末・宝永期の浮
世草子の演劇を撮する傾向を増長した点に文
学史的意義があり、本節では、そのような本
書の方法を具体的に跡づけた。



No. 54

No. 53

早稲田大学論文用紙

本書巻頭には、宇治嘉太夫正本、団扇曾我
(京の巻)、竹本義太夫正本、百日曾我(大坂
の巻)、林和泉太夫正本、関東曾我(江戸の巻)
の「傾城請状」の詞章と各太夫の肖像が、各
巻三丁ほど配されている。本書刊行の前年頃
上演されたこれらの浄瑠璃の流行に便乗し、
冒頭の浄瑠璃詞章をフロットに利用するとい
うのが、まず第一にあげられる趣向である。
第二の趣向には、登場人物に実在の役者を
なぞらえ、それを「替名」と絵入狂言本風な
挿絵に描き込まれる定紋とによって、読者に
示していることが指摘できる。各巻目録上部
には、それぞれ主人公に擬せられる三人の立
役、坂田藤十郎・嵐三右衛門・中村七三郎の
定紋が描かれるが、この三人以外にも、主要
な登場人物について、挿絵の定紋を見れば、
読者はどの役者が誰になぞらえられているの
が類推することが可能で、言わば架空の芝居
を読むことかできた。

この二つの趣向のほかに、本書の特徴とし



No. 56

No. 55

早稲田大学論文用紙

ては、刊行直前の元禄十四年春頃の演劇界の
現況をふまえて執筆されていること、個性豊
かな役者の芸風を随所に書き込んでいること、
多くの場面で演劇の趣向取りを行なっている
ことがあげられる。また大坂の巻では、好色
一代女^四が剽竊される。
本書の趣向は、石山寺誓湖^四の藤十郎の紙
子譲りや、近松^四心中刃は氷の朝日^四にも取
り入れられ、江島其磧^四の風流曲三味線^四へも
影響を与えた。

七 元禄末期の浮世草子と役者評判記
本節では、元禄末・宝永初年頃の浮世草子
にあらわれる演劇的傾向について、特に役者
評判記との関連に焦点をしぼり、考察を試み
た。

元禄十二年刊の役者評判記^四、役者口三味線
の書型を模倣し、元禄十四年刊^四のけいせい請
状^四、けいせい色三味線^四には横本が採用された。
書型のみならず、役者評判記の文章をも剽竊



No. 58

No. 57

早稲田大学論文用紙

した浮世草子の例として、^四遊色かつら男^四を
取りあげた。この本は天理図書館蔵の端本が
唯一の伝本で、刊記は詳らかでないが、挿絵
の画風から推定して、遅くとも宝永末頃まで
には刊行されたものである。この浮世草子
には、元禄十三年刊^一役者万年曆^四開口部^ハ
大幅に剽窃されている。
開口部^ハだけではなく、役者評判記の芸評部
分の影響をうけた^四元禄大平記^四巻ハヤ^四飛
鳥川当流男^四のような例も、元禄末期には目
立ってくる。

以下、^四女大名丹前能^四元禄曾我物語^四風流
日本莊子^四御前於伽^四元禄大平記^四五ヶの津
余情男^四飛鳥川当流男^四男色木芽漬^四心中恋
のかたまり^四風流連三味線^四男色歌書羽織^四
^四大尽三ッ盃^四の、役者評判記の影響のみう
れる箇所を列挙した。

本論文の反省と研究の展望



No. 60

No. 59

早稲田大学論文用紙

概ね、本論考は、二章、三章、一章の順に執筆した。最も早い時期の執筆は、一九七九年で、最近の論文執筆時は一九九四年であるから、その間は十五年に及ぶ。当初の「西村本」研究では、西鶴の影響を論ずるのに、しばしば執筆姿勢や作者の認識を問題にした。か、西鶴作品を論究する際には、作者の認識に二つの点では旧来の説をなぞるに終わると考え、作品構造そのものを論ずることにした。西鶴没後の作者、作品研究にいたっては、ほとんど基礎研究である。

このような方法論の混乱は、十五年間の研究生活の試行錯誤の結果であると言え、反省の第一にあげなければならない。

第二には、序章で述べた文学史的パースペクティブが、各論に十分に生かされなかったことである。特に二章・三章は、資料紹介や書誌、伝記等の基礎研究が多かったので、文学史的観点からの言及に欠けたきらいがある。以上の二点の反省の上に、今後は、文学史



No. 62

No. 61

文化史的発想から、西鶴とその周辺の浮世草
子について論じてみたい。とりわけ、出版メ
ディアを視野に入れ、グローバルな価値観を
うみだした元禄期の文化状況等を考察したい
と思う。

早稲田大学論文用紙